

現生人類 ホモ・サピエンスから 新人類 ネオ・サピエンスへ

まほろば主人
宮下 周平

衝撃「三大革命」！！

年始早々、とある方から突然、最新情報が届けられた。

「人類史はフィクション（虚構）であった！！」
という衝撃的なメッセージだ。

250 万年と言われる人類の歴史は、ついに幸福に至れなかった。

今、滅亡か飛躍かの断崖に立たされている人類。
甚だ、全地球的な手に余る大問題だ。
しかし、一人一人の身に詰まされる問題でもあった。

「国家も、経済も、宗教も、農業さえ、妄想の産物であった」というから、只事ではない。

それが、48 カ国、200 万部以上売り上げた世界的大ベストセラーとなり、オバマ大統領からビル・ゲイツなど錚々たる著名人をも夢中にさせた。

その名も「サピエンス全史」。

著者は、若きユダヤの歴史学者、ユヴァル・ノア・ハラリ氏。

「ナショナリズムは妄想」、「経済成長と幸せは別物」、「農耕社会で豊かになったのはエリート層」などと、極めて正鵠を射た問題提示に、ある意味胸の透く思いだ。



7 万年前に起きた「認知革命」、1.2 万年前の「農業革命」、500 年前の「科学革命」などのターニングポイントで、人類は進化発展したかのように見えるが、実は不幸というどん底に向かっていくに過ぎないという。



第一「認知革命」

人類は、イメージ・想像力によって、他の生き物を大きく引き離して来た。か弱きネオ・サピエンスが、彼の強健なネアンデルタール人を絶滅に追いやったのも、この想像力であった。現実にはない物への空想によって、何万何億もの民衆を引き込む神話や帝国や宗教という『共同幻想』を築いて絶大なる力を獲得して来た。細き一本の葦が、無限の人々を共有して協力させるといふ、それまで有り得ない空前の集団力で、他の生物を圧倒的に制圧したのだ。



貨幣経済の誕生

さらに、国や宗教の対立差別さえ超えて、すり抜けた共通価値が生まれた。それが、貨幣制度だ。この発明によって、一瞬にして広い世界を一つにしまった。観念でなく、事物によって共有認識とした大革命だった。何の価値もない一枚の紙切れに実態があると刷り込んだ「貨幣経済」。無限に発展して、我々を幸福にすると信じさせて来た「資本主義」。その結果、貧富の格差は開き、宗教同志の憎悪は増し、国家間の戦争



ユヴァル・ノア・ハラリ

が絶え間なくエスカレートするばかりである。もはやグローバル経済は虚妄、資本主義社会は限界に来てしまった。

第二「農業革命」

自然と最も関わりある農業さえ、「史上最大の詐欺だった」と看破する。

単位面積当たり急速な食糧増産によって寿命が延び、人類は爆発的に増え続けた。だが、それは王侯貴族などの搾取構造と特権階級の生活を向上させたに過ぎなかった。大半の就農者はきつい肉体労働の割に見返りは少なく、2 万年前の狩猟採集の石器時代より生活の質は悪化したただけだった。

肉・魚・木の実などの狩猟生活による天与の恵みは調和が取れていた。しかし、米・小麦の主食に偏った食物は貧しく、定住生活はバランスを欠き、栄養失調や感染症を引き起こして来たのだ。実は、現代に蔓延る無限の病根病巣は、この根本原因にあることに人類は気づき始めている。



縄文から弥生時代へ

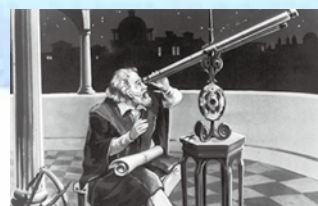
氏の見解の多くは西洋史観に偏るが、わが国に引き寄せれば、了解せられる部分が少なくない。それは、縄文と弥生のライフスタイルに当て嵌められる。狩猟採集により国の概念もない平和だった縄文時代。しかし後、渡来弥生人により農耕生活が始まったものの、王権国家の成立により戦国時代の幕開けとなったことも確かだ。



第三「科学革命」

更に、この認知力・生産力を助長させたのが「科学革命」だ。宗教や国家を超絶した科学的結果は、誰もが認めざるを得なかった。人類はその前には有無も言わず、平伏しかなかった。以前は、神仏や神官僧侶に依存していた真理の伝達は、科学が易々と

それに取って代わったのだ。
新しい科学技術は、さらなる進歩と富を生むと妄想し



ている途上が現代社会だ。

科学力の最先端「人工知能・AI」

この急速な進歩は目覚ましく、実際人工知能によって人間が使われる日は、さほど遠くない。人智が次々と敗者に下って行っている。現実的に、AI 化により失業失職が急速に広がり、社会の大問題となっている。バイオ技術や人工知能が、人間の体や頭脳、心のあり方まで変えてしまう生命操作の恐ろしさ、進化のスピードや能力を、人間の力ではコントロールできない時が遠からず来るであろう。そして、この1、2 世紀の間に、高度な認知力、思考能力をもった異質な存在に取って代われ、人類は姿を消すまで、このハラリ氏は予言している。最早、SF の世界ではなく、超現実として我々人類に、その問いを突き付けているのだ。



他人事ではない。スマホやPC なしで、我々は生きていられなくなっているではないか。現代人は、支配されないまでも、すでに完全に人工知能に取り込まれているのだ。

フィクション リアリティ 虚構と現実

この世の中の現実が、果たして現実なのか。存在しているのか。

仏陀は、「一切の所現は、心が作り出した映像、錯覚、幻想に過ぎない」と説いている。一切の物事は存在しない、まさに夢であると。

その無いものを有ると信じて来たのが、現生人類なのだ。虚構を、現実だと錯覚した上に何物を構築しても、砂上の楼閣なのだ。崩れるしかない。それが「三大革命」の実体であった。

イマジネーション・想像力が形となったフィクションが、虚構なのではない。この世自体が、元々虚構

なのだ。この世は虚しく、流れ去る、滅び去るということこそ、リアリティ、真の現実なのだ。

東西史観の統合と止揚

「想像力」を、「農業」を、「科学」を、全面否定すれば、この問題は解決するのであろうか。それは、滅亡する以外に道はないだろう。

人類の大枠の推移の中で、何が問題だったのか、改めて見詰め直す以外に、我々に残された道はない。三大革命が悪いのではない、それを人類が、幸福への拡大する道具として捉えたこと、利用したことが、一切を狂わした元凶なのだ。物を得ること、富を増やすこと、何よりも力が、生きる目的、人生の勝利、救いの道と捉えたのが、そもそもの誤りだった。

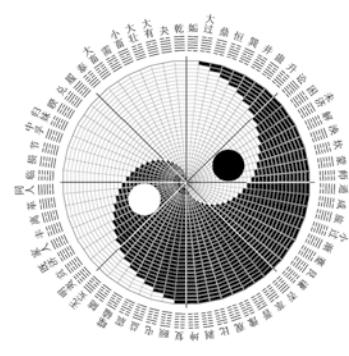
西洋から観た歴史観・自然観を、東洋的なそれに置き換えると、がらりと様相が逆転する。唯物史観と唯心史観。時代は、その統合と止揚の機運にある。両面を程よく保ち、新たな歴史観を創出することだ。

『色即是空』『不易流行』と『易』の智慧

形あるものを色^{しき}と言い、形なきものを空^{くう}という。色は空であり、空は即ち色であると説く「般若心経」は、日本人には日常に馴染み深いお経だ。『色即是空、空即是色』は、言わずして日本人が感得している心であり、悟りなのだ。

芭蕉も俳句の真髄は、『不易流行』と説く。それは、四季の移り行く自然や風物の流行にこそ、不易という変わらない真理があるという。真理という変わらないものはないのだ。

これこそ東洋思想の神髄^{かみ}、易^かという学問、『易学』の根本原理を表現する言葉だ。変わるという事こそが、変わらないのだ。仏教でも、儒学・道門でも、説く処は一つである。



『知足』『小国寡民』に行き着く

形あるものの中に諸行無常のあわれを感得し、物



に心を観て、一切は心の所現であると悟った時、物はさほど要らなくなる。それは、「足るを知る」と言う古よりの訓言なのだ。

まほろばの社訓、老子の言う『小国寡民』こそ、平和の原点とされて来た。ほどほどの所で、手を打つ、諦める、そこに留まる、振り返る。これこそ、自然と長く付き合う東洋の智慧、賢者の流儀なのだ。

250 万年の壮大な歴史に抗するに、壮大な哲学や方策は要らないのだ。たった二文字「知足」で充分足りるばかりか、それらを圧倒的に凌駕する宇宙の知識、叡智である。他に解決方法が、有るのではない。生きるほどの「少欲」で、充分この難題が解決されるのだ。生かされるのだ。

『三大革命』は愉快なこと

天国・極楽を「イメージ」することは、楽しいではないか。愉快ではないか。イマジンはイイことだ。「農業」だって、種をまき、育て、収穫する、それを皆が楽しむ。農業ほど、こんな素敵^{からく}な生き方はない。「科学」だって面白い。こんな絡繰^{からく}りを神様が作っているなんて、宇宙は深いな一と感嘆する。要は、科学を適度に使えばよいのだ。

「国」だって、真に自国を愛することは、他国を尊



重することと分かる。風土や文化の違いが、国柄になって、色とりどりの『世界で一つだけの花』となって、それぞれを愛することは、実に豊かで美しいことに気付く。

日本を、本当に愛することは、他国を愛し愛される原理でもあるのだ。自著『倭詩／やまとうた』^{なな}はそんな思いで綴られた。その中心が「情緒」。人は「情け」の縦糸・横糸を織って、人とも自然とも繋^もがれていく、というメッセージが鏤^もめられている。

その為には、国は小さくなければならない。もはや国とは言われないほどに。

自分に帰って

まほろばという会社組織、経営と就労という労使関係、仕入れ販売するという貨幣経済、農業生産するという自然からの獲得、みな『サピエンス全史』の虚構の上に、自然食普及運動も成り立っているだろう。

しかし、それは全一的な見方ではないのではなかろうか。「虚を借りて実を為す」。移り行く形態を通して働く処に、まほろばの存在意義はあると思う。

汗水流して生まれ出した生産者の農産物や加工品に、何の嘘^{うそ}があろう。それこそ、自然からの贈り物、人としての真心ではないか。そして、それに感動して食す人々が居てこそ、その花が美しく開く。そして、ちょっぴり、それをお手伝い出来た我々も、その喜びに預かる。こんな嬉しい楽しい仕事はない。「ありがとう」、「ありがとう」と周りは「ありがとうだらけ」になる。もうこれだけで、この世は極楽天国になってしまう。私たちの生き方は、それで十分な気がしていた。



最後に、改めて

「かごめ、かごめ、籠^{かご}の中の鳥は……」

まほろばは、初期の頃から資本主義経済に翻弄されまいと、『小国寡民』という原点回帰の理想を掲げ、直営農場を持ち、オリジナル商品を創り、できるだけ狭い範囲で、生産と流通、消費が完結するように努力してきました。

しかしながら、本質的には貨幣経済の枠内にいることには、何も変わっていなかったのです。この資本主義社会の中であって、組織を存続させようとすれば、効率を追求する、利益を追求するという経済行為を離れる事は出来ず、役員会議は、常に理想と現実^{はざま}の狭間で、結論の出ないまま終わることが多かったのです。

どんなに個人として、企業として努力しようとも解決できない矛盾を抱えているのです。

おそらく、この矛盾は、個々人が貨幣経済に左右されない生活、お金が無くても生きていける生活を獲得

することなくしては実現できない事のように思えます。

そこでは労働をお金で買うというような利害関係で成り立つ労使関係もなく、それぞれが平等で、独立した個人としてお互いに協力し合うだけなのです。

お金という架空の価値ではなく、誰もが平等に受けられる大地の生み出す『一粒万倍』という実態のある価値に回帰すること。

だからと言って、昔に戻る事でもなく、生まれ合わせた現代という立脚点をしっかりと踏まえながら、何を為し、何を育てていくのか、生命という原点を基軸に新しい生き方を模索していきたいと思います。



次代の扉を、共に

新しい年の初めに、多分に難しい問題を投げかけてしまいました。しかし、これは私たち一人一人の大問題でもあります。

これを越えることなしに、次の世界は開かれないうに思えます。

西年は変革の年、ことに今年は大変革の年だと言われています。

どうぞ、皆様とともに、新しい時代の扉を開くよう努力して参りましょう。

皆様のご多幸を、ご壮健を心よりお祈り申し上げます。

(2017 年 1 月吉日)

